

〈港の女〉と私



港町横浜に生まれて育った。とはいっても、山手や伊勢佐木町などの本当のハマ育ちではない。戦後にできた、いわば新開地の住人である。

母方の祖父母は能登の出身だが、母は生粋のハマの育ちだった。毎日、伊勢佐木町の商店街を通って小学校に行き帰った母にとっては、なかなか連れて行ってもらえなかったロードショーのオデロン座や、同じ学校に社長の子どもたちがいた有隣堂書店や、やはりお嬢さんが母の妹の同級生だったシウマイで有名な博雅などが、晩年まで星座のように、心の決まった位置に輝いていた。

母の語る横浜は、東京とは全く異なるきらめきに満ちた宇宙だった。まさか開国の当時ほどではないが、いわゆる舶来の高級品が、東京の三越や高島屋にはなくても、元町には揃っていたし、戦後GHQが接収して総司令部を置いたのもホテルニューグランドだった。祖父の家の隣の女主人は、英語が堪能なので、マッカーサー夫人の秘書を務めたひとだった。

いわば、外来の文化を、凌辱すれすれの形で受容し、荒々しい異風を放ったのが横浜の魅力だったのだろう。私が成長する頃には、もうその独特の魅力は薄れて、横浜は東京の衛星都市になりつつあった。その横浜の魅惑の名残を留めているのが、三島由紀夫の小説『午後の曳航』である。

三島の戯曲は別として、小説は、今読むと絢爛たる修辭ばかりが目立って、古びた印象が否めないものが多い。だが、『午後の曳航』は傑作だと思う。少女時代に読んだが、「臙脂の下着に黒絹のレースの着物を着て、(中略)たとえようもないほど美しかった」という、初めて男と逢う女の装いなど、細部がありありと浮かんで来る。

舞台は元町の舶来洋品店で、未亡人の若く美しい女主人房子と、十三歳の息子登、そして房子と結婚しようとする二等航海士の龍二の物語である。三島好みの上流ブルジョワ家庭なので、下町の商家の娘だった私の母の全く知らない横浜の生活が描かれている。主人公登は、夜中に脱け出したことがあるために、外から鍵のかかる寝室で夜を過ごさねばならない。鍵をかけるのは母である。登は、夜夜な夜、壁の穴から母の裸身を覗き見ている。テニスで鍛えている母の体は均整が取れて美しく、自身でそれを確かめるかのように、母は寝る前に全裸になるのだ。

性に目覚めた少年と独り身の母との危うい均衡は、母が龍二と恋に落ちたことで一気に崩れる。最初、登は龍二を、海という異界の英雄として崇拜した。だが、母が龍二との再婚を決意し、龍二が凡庸な(父)の役割を演じ始めると、登はたちまち幻滅し、早熟な少年たちの仲間龍二を断罪し、誘い出して殺すことにする。

僕たちはみんな天才だ、十四歳になる前に、法律で罰せられないうちに世界の虚無の秩序を人間の血で支えなければならぬという、少年たちの論理は、はるか後の(少年A)を予見するような迫真性がある。

睡眠薬入りの紅茶を飲まれた龍二は、ひどく苦かったように感じる。「誰も知らないに、栄光の味は苦い。」という結びが忘れがたい。(曳航)と(栄光)を掛けた言葉遊びであるが、三島の生涯が暗示されているかのようだ。

この小説では、港や船について丹念に書き込まれているのはもちろんだが、「一生を男のお洒落に捧げたような男」である舶来洋品店の老支配人や、外国の映画祭で買ってくるはずのお土産を房子の店で揃えようとする映画女優の脇役が、三島の小説の常として、巧みに面白く造形されている。誰もが簡単に海外に行かれる現在とは違って、元町がミニチュアの異郷だった時代が、彼らと共に刻印されている。

そして、誇り高い房子が望むのは、「港の女」になりたくないということである。港々に女がいる船乗りの恋人を、空しく待ち焦がれる惨めさを、房子は自分に許すことができない。それは、堅気のブルジョワという、陸の世界における階級を剥奪されて、海の世界の女、陸の秩序から外れたアウトローの存在になることだからだ。

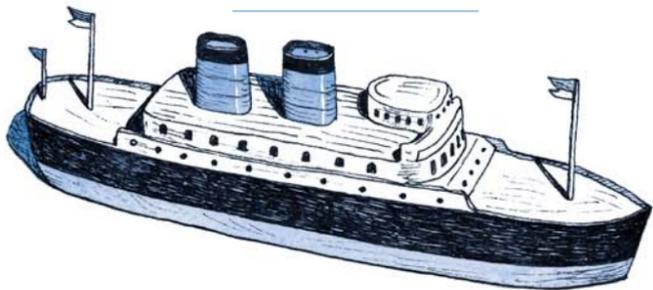
それゆえ、房子は、龍二を陸の世界の秩序に迎え入れようとして、(世界の虚無の秩序)をつかさどる登と仲間の少年たち(とりわけ首領と呼ばれるリーダー)の怒りを招いた。

ここまで考えて、自分を振り返ってみる。

私は(港の女)だろうか。船乗りの恋人を持ったことはないが、気質としては陸の世界よりも合っているかも知れない。

たとえば、有名な(港のメリーさん)にも、私は高校生の時、何度か横浜駅のダイヤモンド地下街で出会っている。彼女の来歴は知らないが、白塗りの化粧に純白のドレスが痛々しく、傷ついた魂の包帯のようだった。陸の世界の秩序から飛び出した存在の、激しい孤独と狂気が、少女の私を揺すぶった。

ハマ育ちではあっても、堅気の生真面目な母をいつも嘆かせて来たのが、私の(港の女)気質なのだった、とやっとな気がついた。



Mizuhara Shion

みずはら・しおん／歌人。1959年、神奈川県横浜市生まれ。早稲田大学大学院仏文学専攻修士課程修了。歌集に『びあか』『あかるた』『エッセイ集』『星の肉体』『空を忘れぬ』など。最新刊は『桜は本当に美しいのか―欲望が生んだ文化装置』。

Illustration by Sasaki Goro